

偉大な所長であり画家であった伊藤光男先生

岡本 祐幸 (名古屋大学 大学院理学研究科 物質理学専攻 (物理系) 教授)

私が伊藤光男先生に初めてお会いしたのは、私が1995年1月に受けた分子研理論研究系助教授の面接の時でした。面接が終わって、私が研究棟201号室を出た時に、私のすぐ後に出て来られて、一言二言声を掛けて頂いた白髪の紳士が伊藤先生でした。お会いして、すぐにこの方は偉い方なのだというオーラが出ておられました。私が分子研に着任した頃は、伊藤先生は年度末に、教授や助教授の中の希望者に海外からの研究者を1人、1週間程分子研へ招聘する追加予算配分を下さっていました。私も手を挙げましたが、その時に、伊藤先生が私に以下のようにおっしゃいました。「既に有名な大御所よりも、君と同年代の若い研究者を招聘しなさい。そうすれば、長い間研究の交流ができるからね。」私はその時、目から鱗が落ちる思いがしました。一流の研究者というのはこういう考え方をするのだなと感心した次第です。分子研では教授と助教授が出席する教授会が月に一度開催されていましたが、教授会での伊藤先生の采配も見事でした。我々助教授にも好き勝手な(?) 発言を許して下さっていました。分子研では助教授は教授への昇進を禁じられていますので、多くの助教授は、自由に発言していました。議論が長引いて本心は困っておられたのだと思いますが、「よく言うよ。」と顔を真っ赤にされて怒られることはあっても、私達の発言を制止されることはありませんでした。流動助教授として東工大から2年間分子研に滞在された細野秀雄さんが、分子研を去られる最後の教授会で、「分子研の助教授が羨ましいです。一度でいいから、うちの教授会で同じように言ってみたいです。」というようなことを言ったのが記憶に残っています。また、私が着任した当時、教授会では緑茶がテーブルの上に置かれ、いつでもお茶が飲めましたが、1時間が1時間半経った時に、休憩としてコーヒーが一杯全員に配られていました。それが私達にとっては教授会における楽しみの一つでした。しかし、ある時、伊藤先生が、「予算が足りなくなったので、これからはコーヒーを廃止します。」とおっしゃいました。そして、その日だけでしたが、全員に和菓子が一個ずつ配られました。粋な計らいだなと思った次第です。伊藤先生は、特に、助教授の間での人気が高く、助教授会と呼ばれる助教授の懇親会にもよく参加して下さいました。ある助教授会で楽しく酒を飲んでいましたら、伊藤先生と濱広幸さん(現東北大)が大きな声で言い合いを始めました。濱さんがその日の教授会での伊藤先生の議論の進め方を批判し、それに対して伊藤先生が反論されているようでした。皆、びっくりして2人を眺めていましたが、2人は既に立ち上がり、その距離がだんだん近づいて行きました。50センチまでになった時に、田原太平さん(現理研)と私が伊藤先生と濱さんを後ろに引っ張り、事無きを得ました(田原さんの制止はその場にいた多くの助教授の記憶に残っているようですが、一応、私も必死に止めていました)。伊藤先生の宿舎でお酒を初めてご馳走になったのは、確か、着任後1年目か2年目の新年交際の時だったと思います。午前中に会が終わった時、伊藤先生がそばにいた谷村吉隆さん(現京大)に「飲みに来るか?」と言い、一緒にいた私にも「岡本もどうだ?」と誘って下さいました。谷村さんは既に伊藤先生宅で何度か飲んでいたようですが、私には、一介の助教授が所長宅にお邪魔するなど考えたこともなかったので躊躇しましたが、結局谷村さんに付いて行きました。それから、親しくさせて頂いて、伊藤先生が岡崎を退職されて東京に引っ越されてからも東京出張時によく茗荷谷のお宅にお邪魔しました。

多くの読者の方もご存知だと思いますが、伊藤先生は水彩画をやっておられました。私達には、「50歳になったら趣味を始めなさい。停年後になんて思っていたら、なかなか上達しなくて手遅れだよ。」とおっしゃっていました。2003年に久保亮五氏関係の講演会に行った時、受付で久保氏の画文集が売られていたので購入しました。それは、久保氏の受勲を記念して出版されたものでした。私はその内容の素晴らしさに感動し、伊藤先生も将来受勲された時にぜひ画文集を出版したいと思います。2004年に瑞寶重光章を受章されたので、この提案をしたら、ご快諾頂きました。2、3週間ぐらいで絵を選び、それぞれの絵の説明文を書いて来られたのでした。そして、画文集「思い出すまま その2」が出版されました。伊藤先生ご夫妻にはお子様がいらっしやらないので、伊藤先生が40年に渡り描いてこられた3千枚の絵がどうなるのかと私は心配しておりました。そして、ある時、伊藤先生に、「信州を旅行していると森の中に小さな美術館を見かけることがよくあります。私達分子研関係者や東北大伊藤研のOBの方々から寄付を募って伊藤美術館を建てたらどうかと思います。」と言いましたら、「費用は自分で出すから前向きに考えたい。」とおっしゃいました。私は念のために、分子研時代の私の博士研究員だった西川武志氏(現計算科学振興財団FOCUS)

に相談しました（彼は世情に明るいので）。西川氏が言うには、「美術館を建てることは可能でしょうが、それを長く維持しようとすれば、大変なお金がかかり、不可能です。むしろ、既存の美術館に伊藤先生の絵を寄贈して常設展を開いてもらうのが賢明です。そして、それを頼むべき美術館は分子研とも縁のある葵丘の他は考えられません。」と言いました。それで、伊藤先生に予定変更を申しましたら、最初は、「自分はいくまで素人だから葵丘に申し訳ない。」とおっしゃいました。しかし、私が葵丘館長の小原淳氏にお願いして、ご快諾頂けたことを伊藤先生にご報告しましたら、大変喜ばれたのでした。葵丘での常設展（分子研レターズ75で小文を書きました）では、6枚の水彩画が展示されており、3ヶ月に一度、伊藤先生が岡崎まで来られて、絵の差し替えを行って来られました。しかし、昨年9月に伊藤先生が緩和ケア病院に入院されてからは、私が代わりに3ヶ月に一度絵の差し替えに行っております。なお、これらの絵は私のホームページの中の「伊藤光男画伯 画集・画文集」で見ることができます。Google等で「伊藤光男画伯」を検索して下さい（なお、以下の鹿野田氏の文章で出てくる「漫談」は伊藤先生が東北大を退官された時に出版された画文集「思い出すまま」に掲載されており、上のホームページで読むことができます）。最後に読者の皆様にはお願いですが、これから私達が世を去り、残った家族が特に伊藤先生の絵をキープしたいというのであれば、額から絵だけを取り出して、葵丘に送って頂けるように、家族に伝えておくようにして下さい。かなり良い作品が皆様の手元に揃っているはずですので。何百年か後に伊藤先生の絵を葵丘で誰かが鑑賞していることを想像すると楽しいです。以上、思い出すままに書きました。改めて伊藤先生に感謝の意を表するとともにご冥福を祈ります。



紫綬褒章祝会にて（1997年5月27日）